

聖書: ヨシュア記 16-17 章

説教題: ヨセフ族の相続地

日 時: 2010 年 8 月 8 日

今日は 16 章と 17 章を一緒に取り上げました。これはカタカナの地名が多いところは早く過ぎ去らせた、という魂胆からではありません。この二つの章にはマナセとエフライムの相続地が記されていますが、これらの部族はヨセフ族という言葉でまとめられます (16 章 1 節)。ヨセフはヤコブの 12 人の息子の一人ですが、そのヨセフの子であるマナセとエフライムを、ヤコブは自分の子どもとする、としました。この結果、ヨセフからはマナセとエフライムの二つの部族が誕生するという 2 倍の祝福を受けたのです。そういう意味でこの二つの部族は互いに関係がありますし、このヨシュア記 16~17 章でもまとめて語られています。

さてヨセフの子どもは生まれた順にマナセ、エフライムとなります (4 節)。ところが相続地が記されている 5 節以降では、弟のエフライム族から先に記されています。これはなぜでしょうか。これは創世記 48 章の出来事と関係します。ヤコブは年老いて病気になった時、ヨセフの子を祝福するために呼び寄せました。ヨセフはその際、父ヤコブの右手が長男マナセの上に来るように子供たちを配置しましたが、ヤコブは手を交差させて、祝福の右手を弟エフライムの上に、そして左手を長男マナセの上に置きました。ヨセフはあわてて父の右手を長男の上に移そうとしましたが、ヤコブは「わかっている、わが子よ。私にはわかっている。」と言い、こう言いました。「長男マナセも一つの民となり、大いなる者となるであろう。しかし弟は彼よりも大きくなり、その子孫は国々を満たすほど多くなるであろう！」皆さんの中にも長男である方がいらっしゃるかと思いますが (私も長男ですが)、こういう箇所を読むと複雑な気持ちにならないでしょうか。聖書には弟が兄に勝るという記事が結構あります。カインとアベル、エサウとヤコブ、放蕩息子の話もそうです。そういう箇所が読まれると、長男は祝福されないダメ人間であるような、神に退けられているような気がして、嫌な感じがしたものです。しかしこのような聖書の記事は、大切なメッセージを語っています。すなわち神は人間のしきたりや人間の考え方に縛られるお方ではない、ということです。反対から言えば、神の私たちにに対する取り扱いは、ただ恵みによる！ということです。人間社会の中では、長男が特権ある地位にあるのは普通のことでしょう。後継ぎとして大事にされ、特に重く見られます。そのような長男がいつも神に祝福されるなら、長男は高慢になるでしょう。自分は栄えある立場にあるから、このように祝されるのは当然である、と。そして感謝もせず、自分と自分の立場を誇るようになる。しかし聖書はしばしば弟をより祝福します。そのような記事を読むと、私たちは慌てふためくのです。一体どういうことなのか、と思うのです。しかしそこに示されることは、神の祝福はただ恵みによる！ということです。無に等しい者、何の功績もない者を、神は恵みによって祝福して下さる、というメッセージが示されるのです。

このメッセージを真に理解するなら、どんな人も望みを持つことができます。長男もそうです。人との比較ではなく、神の前で考えるなら、長男も何も誇ることは持っていません。神の御前には何の主張もできない卑しい者です。しかし神は恵みによって祝福して下さる方なら、この私も望みを持つことができる。ただこの方の恵みに頼って、貧しい私も頂くことができる！

ちなみに聖書では弟の方が勝る箇所が多くあるからと言って、兄がそれ自体で退けられているわけ

ではないはっきりした証拠があります。聖書に出て来る祝福された長男は誰でしょうか。それはイエス様です！もし誰かがキリスト教では長男は祝福されないと言うなら、その人を決定的に反駁できる例がここに 있습니다。すなわち私たちの救い主イエス様は長男！ということです。ですから私たちは今日のような箇所があるからと言って、長男であることを残念に思ったり、居場所がないように思う必要はない。むしろ喜んでこの立場を受け入れ、イエス様と共に歩いて行けば良いのです。

さて、エフライム族の相続地から見て行きます。その境界線が16章に記されています。1～4節はヨセフ族全体の境界線として、エリコからベテル、ルズ、ベテ・ホロン、そして海すなわち地中海に至る線が示されています。これはそのままエフライム族の南の境界線となります。エフライム族の残りの境界線が5節から記されます。5節は今見た1～4節の要約です。6～8節は北側の境界線です。ここは少しややこしいか書き方になっており、まず中央部から始まってミクメタテに出、そこから東に向かう境界線がたどられています。そして最後は7節にあるようにヨルダン川へと出ます。そして8節からは反対に中央部のタブアハからカナ川に沿って西に向かう境界線が記されています。その最後は地中海となります。こういうエフライム族の相続地の記述の中にも彼らの失敗の記録があります。すなわち10節のゲゼルに住むカナン人を追い払わなかった、ということです。前回見た16章63節のユダ族もそうでしたが、エフライム族も徹底的に主に従うことを怠ったのです。この小さな記録が、今すぐではなくても、後々大きな意味を持つこととなります。

17章はマナセ族の割り当て地についてです。すでにマナセの半部族はヨルダン川東側に広大な地を受け継いでいました。なのに、なぜ西側にも割り当て地を持つのか、の説明が6節までにあります。マナセ族には、2節にある通り、アビエゼル、ヘレク、アスリエル、シェケム、ヘフェル、シェミダの6つの氏族がありました。このうち、ヘフェルの子ツエロフハデには男の子が誕生せず、女の子ばかりが5人も生まれました。その結果、そのままではこの氏族は相続地を受け継ぐことができなくなるということで、かつて彼女たちはモーセに訴え、その願いを承認されました。こうしてマナセ族はヨルダン川西側にも相続地を持つことになったのです。その境界線が7節からのところにあります。ここに出て来るミクメタテ、エン・タブアハ、カナ川などは、先ほど見たエフライム族の北の境界線に位置する町や川です。それがマナセ族の南の境界線となります。そして北はアシェル、東はイッサカルに接していたことが10節に記されています。そして11～13節には、お決まりのパターンであるかのように失敗の記録があります。彼らは北方のベテ・シェアン、イブレアム、ドル、タナク、メギドなどの地も与えられました。しかし彼らはこの町を占領できず、そこに住むカナン人を追い払いませんでした。

こうしたヨセフ族の問題点を浮き彫りにするエピソードが最後17章の14～18節にあります。まず14節：「ヨセフ族はヨシュアに告げて言った。『主が今まで私を祝福されたので、私は数の多い民になりました。あなたはなぜ、私にただ一つのくじによる相続地、ただ一つの割り当て地しか分けてくださらなかったのですか。』」 彼らはここで不満を述べています。自分たちは主に祝福され、こんなに数が多いのに、その相続地は少ない！と。確かに土地の割り当てに関しては、人口が多い部族には相続地もより多く、という原則がありました。しかしヨセフ族に与えられた土地は、そんなに狭かったのでしょうか。巻末の聖書地図を開いて頂ければ分かりますが、マナセとエフライムは約束の地の中央に相当な広さの地域を与えられています。またヨルダン川東側にも広々とした土地が与えられています。

人口はどうでしょう。民数記 26 章によるとマナセ族は 52,700 人で、その半分が西側に住むとして約 26,000 人。それにエフライム族の 32,500 人を足しても 6 万人以下です。このヨセフ族よりもユダ族、ダン族、イッサカル族、ゼブルン族の方が人口が多い。約束の地の南側にすでにユダ族がどっさり広い地を取り、中部から北部にかけてヨセフ族がこんなに相続地を取って、さらにもっとよこせ！と言うなら、残りの 7 部族は一体どこに住めば良いのでしょうか！そんな彼らのことを考えるなら、ヨセフ族の割り当て地は明らかに大きいものです。しかし彼らは感謝しない。神が与えて下さった土地を最小限にしか見ず、「たったこれだけか！」とぼやいている。

そんな彼らにヨシヤは 15 節で「もしもあなたが数の多い民であるなら、ペリジ人やレファイム人の地の森に上って行って、そこを自分で切り開くがよい。エフライムの山地は、あなたには狭すぎるのだから。」と言います。それに対してヨセフ族はまた答えます。16 節：「山地は私どもには十分ではありません。それに、谷間の地に住んでいるカナン人も、ベテ・シェアンとそれに属する村落にいる者も、イズレエルの谷にいる者もみな、鉄の戦車を持っています。」ここに彼らの真の問題が示されています。ヨセフ族は自分たちの割り当て地の中に、追い払えそうにない強い住民がいることに恐れているのです。本来、各部族に土地が割り当てられたのは、彼らがその地に住み、その隅々まで徹底して獲得して行くためです。ヨセフ族はそれをしないで、自分たちが住めるところは狭いと言っているのです。

ヨシヤは彼らの言い分を認めません。17～18 節でこう言います。「あなたは数の多い民で、大きな力を持っている。あなたは、ただ一つのくじによる割り当て地だけを持っていてはならない。山地もあなたのものとしなければならない。それが森であっても、切り開いて、その終わる所まで、あなたのものとしなければならない。カナン人は鉄の戦車を持っていて、強いのだから、あなたは彼らを追いつまわなければならないのだ。」ここで考慮して良いのは、ヨシヤはエフライム出身であることです。ヨシヤは自分と同じ部族の人たちの願いだからと言って、甘く扱いません。割り当てられた地の終わるところまで自分のものとせよ！と言います。手強い存在がそこにいるなら、なおさらその仕事に取り掛からなくてはならない！と。このヨセフ族と対照的なのは、先に見たカレブでしょう。85 歳になっても、「主がともにいてくだされば」と主に信頼し、アナク人に立ち向かい、勝利しました。それが大事です。割り当て地に困難があっても、主に信頼してその支配を広げて行くこと。そして主が備えられた祝福を全部受け取ること。その信仰の戦いに踏み出すようにとヨシヤはヨセフ族に語ったのです。

この箇所は私たちにどう適用されるのでしょうか。私たちも一人一人、神によって様々なものを割り当てられています。今の生活場所、環境、あるいは仕事、人間関係、賜物、能力、経済的状況・・・。その自分の割り当てられたものに対して、私たちはヨセフ族のように不満を漏らしていることはないのでしょうか。確かにその割り当て地には困難がたくさんあるかもしれません。ヨセフ族のように切り開くのが困難な山地があるかもしれません。あるいは鉄の戦車を持つ手強い敵がいるかもしれません。そういう状況で私たちはともすれば自分の悲運を嘆きがちです。ああ何と今の私の状況は、私が願っている状態からは程遠いことか！と。

しかしヨセフ族の相続地は主のくじによって割り当てられたように、私たち一人一人の生活も神によって割り当てられたものです。そう捉える時、今日の箇所は私たちの置かれた状況と重なって来るのではないのでしょうか。様々な困難や課題は主にあって私たちに与えられているチャレンジです。私

たちはそれを見てただ不満を漏らしたり、嘆いていたりしてはならない。それらは主の力によって私たちが攻め取るべきもの、乗り越え打ち勝って行くべきものなのではないでしょうか。その戦いをせずに、ただ自分のところは狭い、祝福が足りないと不満を述べていることはないでしょうか。

ヨシュアは言いました。「それが森であっても、切り開いて、その終わる所まで、あなたのものとしなければならない。」 様々な困難を前にして失望するのではなく、それは主によって私に与えられた課題として受け止め、主に信頼して立ち向かって行きたいと思います。私たちにとっての望みは、神は恵みの神であること、私たちの考えをはるかに超えて不思議をなさる神であることです。この方は鉄の戦車を持つカナン人さえも私に打ち破らせることができるお方です。その方を見上げて祈りつつ取り組み、主の力によって相続地を広げ、主の祝福をさらに豊かに受け取って行く歩みへ進みたいと思います。